

CAF賞 2022 入選作品展覧会

Contemporary Art Foundation Award 2022

「CAF賞」は、学生の創作活動の支援と日本の現代芸術の振興を目的に開催し、日本全国の高校・大学・大学院・専門学校の学生、および日本国籍を有し海外の教育機関に在籍する学生の作品を対象としたアートアワードで、今年で9回目を迎えます。

この度、「CAF賞2022入選作品展覧会」を、11月29日(火)～12月4日(日)の6日間、東京・代官山のヒルサイドフォーラムにて開催いたしました。

公益財団法人 現代芸術振興財団

- 現代芸術振興財団について

公益財団法人現代芸術振興財団は2012年に設立されました。展覧会事業を通して、人々が現代アートに親しむことのできる環境をつくること、表彰事業を通して未来へ文化をつなぐアーティストの活躍の機会を増やすことを目的に活動しています。

- 設立者・前澤友作について

1975年千葉県生まれ。早稲田実業学校卒業後、バンド活動の一環で渡米。帰国後、1998年に輸入CD・レコードのカタログ販売を手がける有限会社スタート・トゥデイを立ち上げ、2004年、ファッションを中心としたインターネットショッピングサイト「ZOZOTOWN(ゾゾタウン)」を開設。2012年、2月に東証一部上場(3092)。同年11月に現代芸術振興財団を設立、現代芸術を中心としたアートコレクターであるとともに、若手アーティストの支援に力を注いでいます。

- 審査員



岩淵 貞哉 | 美術手帖総編集長 |

1975年、横浜市生まれ。1999年慶応義塾大学経済学部卒業。2008年に「美術手帖」編集長となり、2019年より現職。2019年に「OIL by 美術手帖」として、アートECサイトとリアル店舗(渋谷パルコ2階)をオープン。公募展の審査員やトークイベントの出演など、幅広い場面でアートシーンに関わる。



金澤 韻 | 現代美術キュレーター |

1973年、神奈川生まれ。東京藝術大学大学院、英国 Royal College of Art(RCA)修了。熊本市現代美術館など公立館での12年にわたる勤務ののち、2013年に独立。国内外で展覧会企画多数。近年企画・参画した主な展覧会に、ヨコハマ・パトリエンナーレ2020(横浜)、「インター+プレイ」、「AKI INOMATA:シグニフィカント・アザネス」、「ウソから出た、まこと」、「毛利悠子:ただし抵抗はあるものとする」、「ラファエル・ローゼンダール:ジェネロシティ 寛容さの美学」(十和田市現代美術館、青森、2018~2022)、杭州繊維芸術三年展(浙江美術館ほか、杭州、2019)、「Enfance」(パレ・ド・トーキョー、パリ、2018)、茨城県北芸術祭(茨城県6市町、2016)など。



名和 晃平 | 彫刻家 / Sandwich Inc. 代表 / 京都芸術大学教授 |

1975年生まれ。京都を拠点に活動。2003年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程彫刻専攻修了。2009年、京都に創作のためのプラットフォーム「Sandwich」を立ち上げる。独自の「PixCell」という概念を軸に、様々な素材とテクノロジーを駆使し、彫刻の新たな可能性を拡げている。近年は建築や舞台のプロジェクトにも取り組み、空間とアートを同時に生み出している。2018年、フランス・ルーヴル美術館にて彫刻作品「Throne」を特別展示。2015年以降、ベルギーの振付家/ダンサーのダミアン・ジャレとの協働によるパフォーマンス作品「VESSEL」を国内外で公演中。

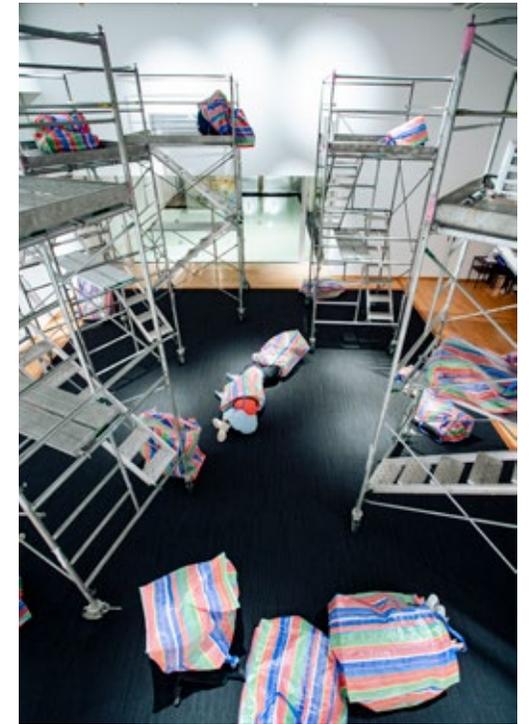


Photo by Keizo Kioku

保坂 健二郎 | 滋賀県立美術館ディレクター(館長) |

1976年生まれ。慶応義塾大学大学院修士課程修了。2000年から2020年まで東京国立近代美術館に勤務。同館にて企画した主な展覧会に「エモーショナル・ドロ잉」(2008)、「フランス・ペーコン展」(2013)、「声ノマ 全身詩人、吉増剛造展」(2016)、「日本の家 1945年以降の建築と暮らし」(2017)、「隈研吾展 新しい公共性をつくるためのネコの5原則」(2021)など。「Logical Emotion: Contemporary Art from Japan」(2014、ハウス・コンストラクティブ美術館他)など国外での企画も行う。2021年より現職。主な著作に「アール・ブリュットアート 日本」(監修、平凡社、2013)など。『すばる』の連載など、芸術についての寄稿多数。





最優秀賞

SAREENA SATTAPON

東京藝術大学大学院

Balen (ciaga) I belong

2022

パフォーマンス、インスタレーション
サイズ可変



> website



不平等な社会において、異なる階級に生きる人々は、互いの存在に気がつくことは決してない。超高層ビルに住む裕福な人々は、高層ビルを建てた労働者や移民の存在に、決して気がつくことはない。この社会は、たった一つの階級の人々だけでなく、あらゆる立場の、全ての人々によって動かされているという事実を、私たちは無視している。

Special Thanks

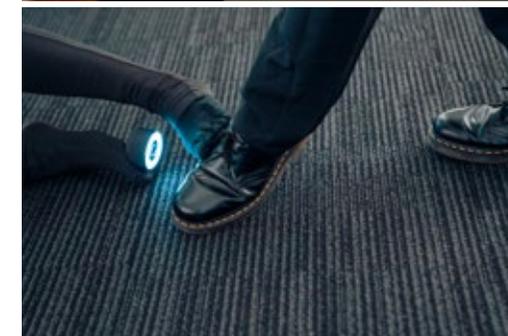
Dan Isomura / Benjamin Korman / Marko Titovskiy
Barbara / Illa Jerasevic / Tatiana Takacova

受賞者 サリーナー サッタポンによるコメント

展示を実現してくださった、すべての皆さまに感謝いたします。今回の作品は、俳優、サウンドコンポーザー、フォトグラファー、インスタレーションアシスタントなど、舞台裏で支えて下さったすべての人々がいなければ実現できませんでした。ここに挙げられていないご尽力いただいた皆さまにも改めて心より感謝申し上げます。また、CAF賞2022で、私の作品を展示する機会を与えてくださった審査員とスタッフにも感謝いたします。これは私の個人的な作品ではなく、皆さまのご協力の上に成立した作品だと思っています。We did it!!

審査員講評

社会の、目に見えない構造を見せようとする作品。鮮やかなインスタレーションとパフォーマンスによって、社会を下層で支えている人たちの困難や努力、そして、人間として生きる尊厳が力強く明白に表現されていた。審査員全員が高い評価で一致したため最優秀賞とした。(金澤)



優秀賞

花形 槇 Shin HANAGATA
多摩美術大学大学院

still human

2021 肉体、カメラ、HMD、全身タイツ
サイズ可変



> website



“still human”とは、「生まれ直し」の実践である。人間社会の過剰な情報を受容する器官としての視覚=目を、カメラとその映像がリアルタイムに映るヘッドマウントディスプレイを用いて、肉体の任意の場所に移植する。そこから立ち上がる肉体は、これまで埋め込まれてきたあらゆる振る舞いを解体し、「正常なる人間」から軽やかに離脱する。

在廊パフォーマンス:齊藤 暉



審査員講評

昨年審査員賞を受賞した《Uber Existence》では、VR機器を通じたアクターの体験の共有が作品として提示されていた。しかし本作ではむしろ、視覚体験を共有しないことによって、パフォーマーの身体が日常空間における異物(オブジェクト)と化し、別の生命体と対峙しているような感覚を鑑賞者に抱かせている。同時に、文字通り「視点を変え」られたパフォーマーたちの長期的な脳や身体の変化を示唆しているようにも受け取れた。鑑賞者やパフォーマーの体験自体が作品になりうるという特徴は、この表現に潜在する可能性の広がりを感じさせる。いずれにせよ、実際に体験してこそ伝わるものが大きい、非常にユニークで興味深い作品である。今後のさらなる展開に期待したい。(名和)



岩淵貞哉審査員賞

SHU BROWN

多摩美術大学

Autopurification

2022 銀塩プリント サイズ可変



> Instagram



> website



フラッシュ脱毛器の黒色だけに反応する特性を活用して、モノクロの銀塩写真を変色させた作品。アウトティングと退学の記憶を辿る風景と、その頃から未だに処理しきれない歪な感情を抱えた自己を写したポートレートを元に制作。身体から何かを取り除きたいという美意識と同じように、消したい感情や記憶の自浄作用の根源はどこにあるのか、鑑賞者に問いかける。また、この青い変色は外気や湿気にとても弱く、そのまま放置すると色が消えてしまう。いつかこの額縁から何かのきっかけで作品が取り出されて、色が消える日が来るかもしれない。でもその時には、私が抱え続けた歪な葛藤など気にしないで生きていける世の中になって欲しいという、切実な祈りを込めた。



審査員講評

作家自身が抱える苦しみや痛みといった葛藤、美容機器を使用し不要なものを除去する行為に重ね、昇華していく作品。モノクロ写真の黒い部分に脱毛器の光を当て、青く結晶化させ美しく変化させている。作品の隅々まで目が行き届いている完成度の高い作品であっただけでなく、展示場所の構成や演出についても意識されていた。開かれた展示空間の少し隠れた一角に、ガラスを通じて展示の様子が見えるようになっているものの、そこから鑑賞者はアプローチできず、眺めるだけで近づくことができないという場所の選び方。作品審査の際にも、会場のトイレの入り口の隠れた壁にひっそりと展示しており、どのように作品を見せるかということ、作品のテーマとが何重にも重ねられ考えられていた。作品や空間が豊かな意味を考えさせ、時間をかけてゆっくりと、自然に伝わって鑑賞者の中に沈殿していくような表現に感銘を受けた。(岩淵)

金澤韻審査員賞

みょうじなまえ Namae MYOJI

東京藝術大学大学院

人形の家

2022 ミクストメディア サイズ可変

本作はイブセンの同名の戯曲「人形の家」と作者自身の物語を綴った私小説「人魚」を元に作られた映像インスタレーション作品で、主人公である「着ぐるみ人形」が日常から脱却し家を出奔するまでの物語をひとつの舞台として表現している。「着ぐるみ」とは人体着用ぬいぐるみの略称であり、その名前の通り、人形と被服というふたつの性質を備えた装いである。作中で使用される衣装や小道具は各々に課せられた「役割」や「演技」などを表しており、これらを身に着けた登場人物は、他者から押し付けられた主体、まさに「人形」として振る舞うことを強いられている。



審査員講評

本作は、ジェンダー、セクシュアリティ、家族という簡単には解けないさまざまな問題について考えさせられる作品であった。物事の複雑さをそのまま優しく抱えるようにして丁寧に作り込んでおり、その作品の抽象度と具象度のバランスから、作家の美術的なセンスの高さがうかがえた。このまま国際的な舞台に持っていった時に、その現代性と明確な表現により、まさに世界の人々に向けて訴えかけることができる作品だと感じた。(金澤)



名和晃平審査員賞

宇留野 圭 Kei URUNO

名古屋芸術大学大学院

17の部屋 - 耳鳴り

2021 ミクストメディア
230 × 300 × 180cm



> website



舞台芸術や映画のセットの様な造作によって作られた16の部屋が複数のダクトによって繋がれており、1つの大きな機械や建築物の様な集合体となっている。ダクトにはそれぞれタイマーによって制御されたファンが取付けられ、部屋の空気を排気させながら循環させている。ダクトにはパイプオルガンの構造を施し、ダクトに空気が流れ込む度に空気が振動し音へと変換され、展示空間全体へと鳴り響いている。それぞれの部屋は自分自身の記憶などの原風景を元にしながら、舞台装置を通し虚構の世界として表象している。



審査員講評

作家が持つ機械設計の知識を美術の領域で展開することで、非常にユニークな大作が作り上げられている。一つ一つの小部屋は一見ただの舞台セットだが、ダクトを通じて小部屋の外に溢れる音を媒介に、いつの間にか鑑賞者の意識は内部へと引き込まれ、没入感に満ちた体験がもたらされる。まるで体内とのつながりをつくっているような、インスタレーションかつ彫刻でもありうる興味深い作品である。また、タイマーによるファンの制御というシンプルなやり方で音の移り変わりを演出していた点も印象深い。音響から空間体験全体に至るまで、作家が手探りで模索し続けて掘り当てた表現のように感じられた。小部屋と共鳴する音だけでも様々な展開が期待できると思った。実際、審議でも「小部屋の中には何も配さなくていいのではないか」との意見もあがっていた。(名和)



保坂健二郎審査員賞

藤原 彩芽 Ayame FUJIWARA

武蔵野美術大学



> Instagram



宇宙人の目シリーズ2022 たんぽぽごっこをしよう!

2022 パネルに白亜地、油彩、テンペラ 93 × 150cm

黄色いワンピースを着た人たちがたんぽぽごっこ中です。たんぽぽごっこはたんぽぽごっこです。そういうのが精神には必要です。生命体的な生死に関わる直接的な危険が無いのは滅多にない境遇で、それだけで私は呑気を極めようと思うのですが、そうしたらいつか世界から孤立する気がします。

宇宙人の目シリーズ2022 エリンギを投げよう!

2022 パネルに白亜地、油彩 233 × 154cm

「この人の絵、エリンギを育てている人に失礼じゃないですか!?!」的な意見に怯えています。「なんか面白い感じがしませんか。によき、みたいな...」などとむやみに思想を主張すると、地球人特有の清潔な理論で私は排除されると思います。生き残るためには、「脳の誤作動」とされることを、「ちょうど良い奇行」に収めるように工夫する必要があります。

審査員講評

書類審査の時から、「宇宙人の目シリーズ2022 たんぽぽごっこをしよう!」に描かれている犬の表情は印象的で、ぜひ実物を見てみたいと思った。黄色を基調にした作品であり、画面全体をまとめるのは大変であったと思われるが、よくまとめられている点で、作家の技量が推し量れる。最終審査で新たに追加された作品は、「エリンギを投げる」という謎のテーマをもとに、シェイブドキャンパスの画面に様々な世界を大小あらゆるスケール感で描いていて、それなのに破綻なくまとめられている。通常シェイブドキャンパスというフォーマリズムの範疇の考え方だと思われがちだが、彼女の場合は自分の見えている視界の範囲内で形を決めているという点で、非常にランダムなのに具体的な意味を持つシェイブドキャンパスで、しかもそれが、絵の中で展開する多様な世界と非常に融合して、その点を含めて素晴らしい作品だと思い、授賞した。(保坂)



倉知 朋之介 Tomonosuke KURACHI

東京藝術大学大学院

ムシ図鑑

2022 映像、段ボール サイズ可変

「森」、「虫取り少年」、「昆虫ハンター」など「ムシ図鑑」という言葉から連想したキーワードを元に制作された映像作品。編集によって繋がられた断片的なエピソードは、その全てに作者本人が登場する。作者自身の存在によってばらばらのエピソードがゆるやかに接続され、映像内の登場人物たちとの交流によって更なる別の物語を発生させる。



黒瀧 舞衣 Mai KUROTAKI

東京藝術大学大学院

右下 ホッケイボッコ

2021 樟、針金 200 × 65 × 65cm

右上 シャカシャカシカク

2022 イチョウ、ビーズ、貝殻 40 × 10 × 10cm

サンカクカタカタ

2022 木曾檜 30 × 15 × 10cm

パタパタマルマル

2022 イチイ、針金 50 × 18 × 10cm

左下 面、白々し

2021 樟 114 × 15 × 9cm

小さな柱

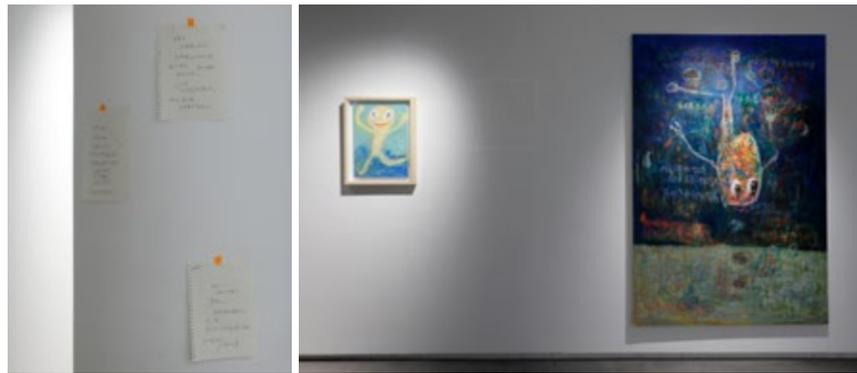
2021 樟、木ダボ 27.5 × 8.5 × 6.5cm

翼のひと

2022 樟 116 × 25 × 44cm

パンデミックが続く世の中、人々を見守るパノプティコン型監視塔をモチーフとした木像である。一本の丸太の生きた長い年月(年輪)をあえて分断し、時の歪みを表現しながら積み重ねひとつの像を形づくる。ちぐはぐで歪な立ち姿は、不安、恐怖、息苦しさ、憤りが形となって現れている。内部は空洞となっており監視塔としての構造を意識しながらも、八角形の胴全方位にわたるアーチ型監獄装飾の連続性と相まって実在性からの解放のまじないとなっている。タイトルの『ホッケイボッコ』とは北の海の棒という意味の造語である。





Wei Ting CHEN

東京藝術大学大学院

断片の詩：かく人と火

2022 絵画、彫刻、ドローイング、詩 インスタレーション
サイズ可変



> Instagram



> website



私は制作の中で、テディベアなどのキャラクター、アンティーク玩具、直観に基づいた落書きなど、子供ならではの符号をたくさん用いる。また、私の絵画は日常で感じたものを詩のように記録するところから始まり、人間の成長における子どもと大人の違いなどマージナルな境界をしばしば描写する。これらの描写は私の創作におけるある種の解釈であり、ロラン・バルトが述べている「断片」の概念に類似している。私の制作は自身の断片の集積でもある。「絵画とは何か？」これは私が常に自分へ問うている問題である。



轟木 麻左臣 Masaomi TODOROKI

東京藝術大学大学院

上 リレーで転んでビリだったとき僕は笑ってた

2022 FRP、塗装、レザー、発泡ウレタン

下 ピエロ

2021 FRP、塗装 289 × 179 × 310cm



> Instagram





松田 ハル Hal MATSUDA

京都芸術大学大学院

不完全の複製

2022
キャンバスにシルクスクリーン、油彩、VR映像、木材、樹脂
161 × 286 × 4 cm

不完全の複製 data / 不完全の複製 data II

2022 シングルチャンネルビデオ

不完全の複製 void

2022 PLP 樹脂、アクリル絵具 サイズ可変

不完全の複製 monochrome

2022
キャンバスにシルクスクリーン、油彩、アクリル絵具
27 × 48 × 4 cm

複製技術としてのシルクスクリーンと三次元を複製する3Dスキャン、VRでのドローイングを用いて、自身の顔やフェイクグリーンを3DスキャンしたものをVR空間上で制作し、複製を繰り返しながらイメージを生成した。現在自分がどの場所で何かを作ることは自分にとって絵画や彫刻の制作手順と変わらず、それらはどちらも現実である。物質や身体は、版画やテクノロジー等の複製という変換を通してリアリティが揺れ動く。SNSやAMAZONでの買い物、メタバース等のものと差異が生まれるよう作品を制作している。



中田 愛美里 Emiri NAKADA

東京藝術大学大学院

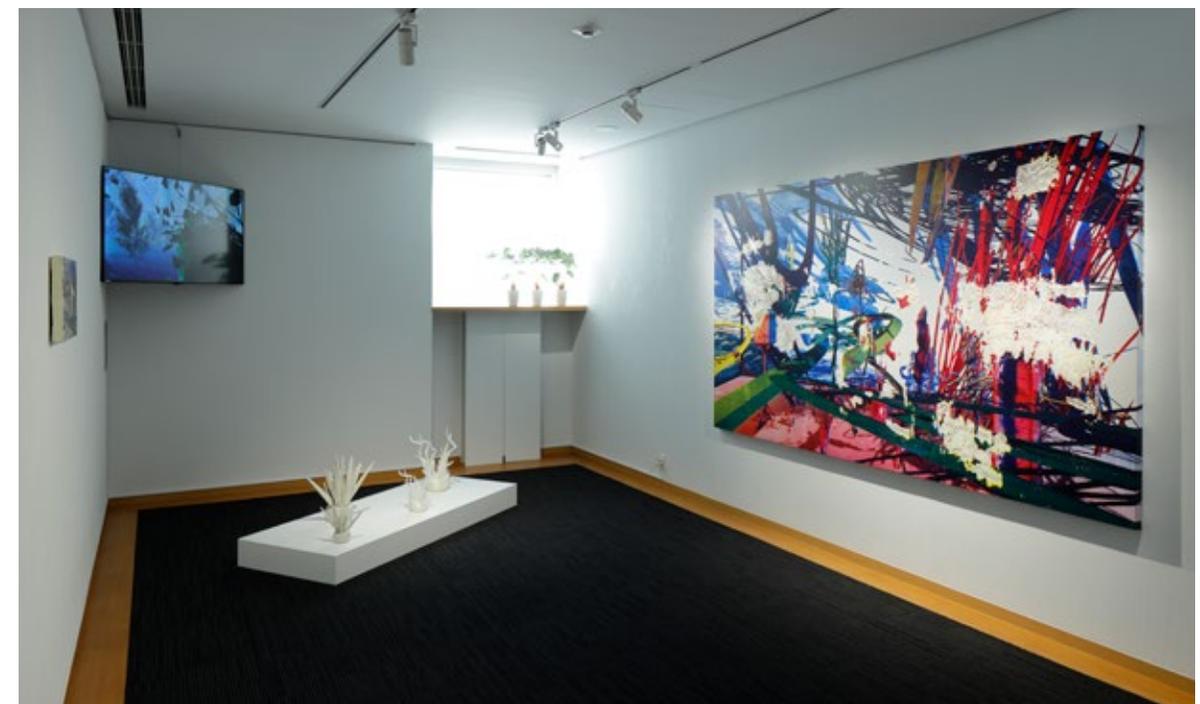
lullaby

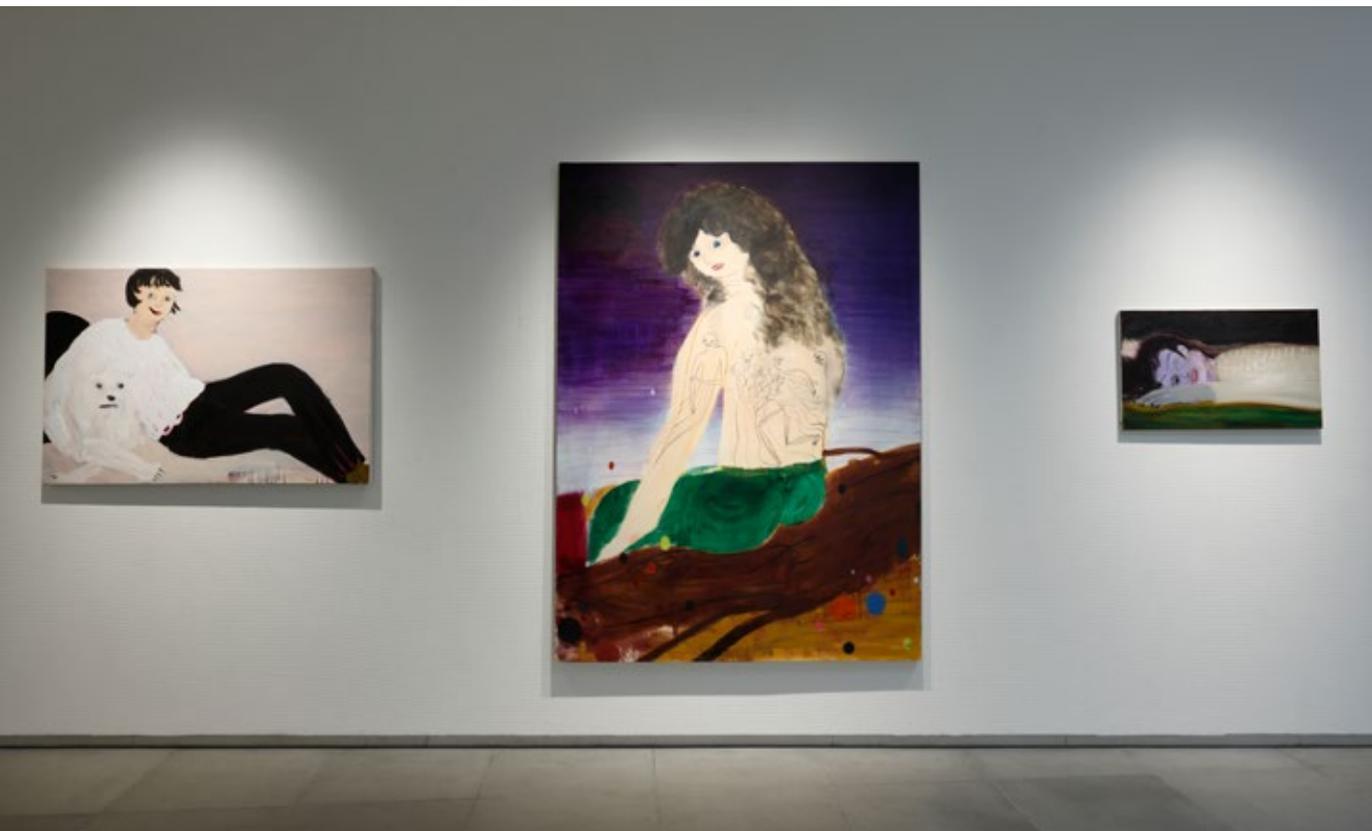
2021 テラコッタ、映像、ミクストメディア サイズ可変

2020年の冬、作品「夢の肖像」が何者かの手により粉々に破壊されてしまった。この作品は破壊されたマリー像のための子守唄である。

バレエ演目「眠れる森の美女」では、悪い妖精カラボスが身勝手な悪意で姫に呪いをかける。そこに現れたリラの精は言う。「呪いを完全に消すことはできません」「しかし私の魔法でやわらげることはできます。」そうして死の呪いを優しい子守唄のような眠りの魔法に変えた。

私にはその魔法をかけたい彫刻がある。消せない呪いを、優しい魔法に変えるために。





南谷 理加 Rika MINAMITANI

東京藝術大学大学院

上中央 ひとり

2022 キャンバスに油彩 190 × 138cm

左 Untitled #0242

2022 キャンバスに油彩 72.8 × 124cm

右 Untitled #0229

2022 キャンバスに油彩 46 × 75.8cm

下 Untitled #0241

2022 キャンバスに油彩 103.7 × 78cm

自分の曖昧で不確実な記憶やひとそれぞれの持つ秘密について描いた。色面と線の対比、色のリズムに気がつかって描いた。



> Instagram



CAF AWARD 2022

Review

December 2, 2022

審査員 美術手帖総編集長

岩淵 貞哉

×

現代美術キュレーター

金澤 韻

×

彫刻家

名和 晃平

×

滋賀県立美術館ディレクター
(館長)

保坂 健二郎

CAF賞2022審査を終えて

—— 本年もCAF賞の審査、大変お疲れ様でした。最終審査にて本展をご観いただきましたが、入選作家みなさまの作品はいかがでしたでしょうか。

金澤 今年は13組の作家がファイナリストとして選ばれました。とても見応えのある展示になっていて、審査も大変でしたね。審査順に改めて作品を見ていきましょう。黒瀧さん(P.17)の作品、造形的な魅力もあり、コンセプトの持つ二面性にも頷けて良い作品だと思いました。今現在も世の中はコロナが蔓延していて、見守り監視する気持ちと、解放されたい気持ちのような相反する感情がひしめいている世情で、そういった「今」と響き合う作品だなと思いました。一方で、オープンになっているわけではないので、中が空洞になっているという点においては、鑑賞する側としてはあまり意味が分からないようにも感じました。

岩淵 彼女は北海道出身ということもあって、北海道の砂澤ピッキの木彫やアイヌの木彫りの民芸品などからの影響を感じます。手を動かす造形的な力がとてもありますね。今後はその影響関係からどう距離をとって分析して、現代を生きる自分のものにしていくか期待したいと思います。

保坂 《ホッカイポッコ》の泣いている表情に、感情が一方向に引っ張られてしまうように感じました。ステートメントの中のパンプティコンの話で、ネガティブとポジティブと両方があると言っていましたが、僕自身はその両義的・多義的な印象を受けませんでした。本当にその両方を表現したいのか、ステートメントにあわせて言っているだけなのか、作品を語ることを含めて、彼女自身が作品をどう捉え掘り下

げているのか、もしかすると彼女はまだ全ては捉え切れていないような気がしました。

名和 僕は、木彫の最後の仕上げ方を彼女はまだ見つけていない、と感じました。壁に展示していた作品のように、大きい作品でも、もっと幅広い樹種や材料を使用しても良いと思います。また、装飾的な造形をコラージュしている印象を受けたので、全体的な造形と、装飾的な細かい造形とを、分けて動かしていったらもっと面白くなりそうです。もしかしたら彩色もしてみると良いかもしれません。

岩淵 倉知さん(P.16)はVineやYouTubeといった動画共有サービスで投稿されるコンテンツの要素を抽出しながらアート作品に仕立てています。多くの人を惹きつける技法と、それがアートフォームに載ってきたときのズレ、違和感が魅力になっていました。

保坂 審査中に言葉やストーリーの流れはあまり考えずに作っている、と言っていたのが意外でした。それでよくあそこまで喋れるなど(笑)。僕は今年の3月に京都で開催していた展示でも倉知さんの別の作品を拝見していましたが、その時と今回のCAF賞で見た作品が、別の作品でありながら、基本的に内容が同じというのが気になる点でした。勢いだけで見ることができて作品自体は面白いのですが、その2本を見て、今後どうやってこの作品を拡大・発展していくのが気になります。

名和 インスタレーション作品としてYouTubeのパロディのように見せてはいますが、結局そのコンテンツとして消費されてしまうようにも感じました。危うそうで危うくない、笑えて安心して見ることができる、というところは毒がなく好きです。

金澤 YouTubeやTikTokに代表されるような現代のメディアの特性をパロディとして変換し、コミュニケーションの容



岩淵 松田さんの造花のオブジェクトなども、展示全体の中で注釈的な意味合いにも見えてしまいました。複製のことも含めて絵画のなかに入っているの、絵画をもっと前面に出してもよかったかもしれません。

保坂 タイトル、ちょっと思わせぶりだったり、素直に絵画だけで見てみたかったですね。彼の画中や空間の判断基準を聞いてみたかったというのがあります。言いたいことがたくさんあるから、まだ確立しきっていないんだろうなと思いました。

金澤 中田さんの作品はアニメーションも立体作品も魅力的ですが、あのインスタレーションではどちらの作品もお互いを打ち消しあってしまっていました。特に、床に敷かれていた絨毯が強い印象を持っていてしまっていたので、例えばあの絨毯も含めて作ってしまうとか、もう少し発展させられたかもしれません。

名和 造形も映像もとても丁寧に作られていましたが、作品の一つ一つが別々に見えてしまっていました。同時に見せる理由が欲しかったです。

金澤 アニメーションはアニメーションで見たかったですね。ソリューションを整理していくと良いかもしれません。そういう意味では松田さんと同じ課題ですね。

サリーナさん(P.4)のパフォーマンス、素晴らしかったですね。

岩淵 最初に工事現場などで使用される足場を組んだクールなインスタレーションを見ただけのときは、階級の上下でおたがいが見えないものを見えるようにするというコンセプトも、やや垂直的で単純化しているかなと思いました。ただパフォーマンスを見て、その印象は一変しました。使用している足場やビニールのバッグなど、造形的に様々なスケールと隠喩を持っていることがより深く理解できました。バッグの中に人が入っていくと、それがまるでビルのように見えたり、墓石に見えたり、足場から落下するときには人に見えたり……。ラスト近くでバッグを持ったパフォー

マーが足場のあいだをかがんでバッグを引きずりながら、必死に通り抜けていく場面も、安定しない生活のなかで移動を強いられる苦労や生き辛さといったものも想起させ、心を動かされました。

名和 バッグが綺麗に揃っていたり、パフォーマーがこなれているのがちょっと均質的で気になりました。パフォーマンスに慣れている、というか。

保坂 例えばあそこに老人とかが出てきたら、また違う見え方があったかもしれません。ただ、パフォーマーやバッグを揃えることで抽象化し均質化することで、何かが見えてくる可能性もあります。彼女自身の作品の落とし込み方としてすごくスタイリッシュだったから、そういう均質的な強い印象を残したようにも思います。彼女の作品が述べている別の階級の人々をお互いが認知することと、そのスタイリッシュで均質的な面とギャップがあって面白いと思いました。

岩淵 僕はパフォーマーの均質性は気になりませんでしたね。パフォーマーはものを動かす黒子のような、ものの動きが前面に出ていた印象を受けました。パフォーマーのなかにも個性があって、すごく綺麗にバッグを整えることにこだわりのある方がいたり(笑)。

金澤 その仕草は重要でした。それぞれが与えられた役割を果たす責任感、というものを表現していたと感じます。社会の底辺にいる人が、必ずしも最初から底辺にいたわけじゃないです。格差拡大でかつて中流だった人々が貧困層になったり、それこそ戦争で住む場所を離れて難民になったり。それが近年起こっている、世界的な流れです。その流れの中で、どこにいても自分自身や自分の仕事にプライドを持って生きる人の姿を見せられた思いです。私はみょうじなまえさん(P.10)の作品も好きでした。作品の意味がはっきりしているので、どこかの国際展に持っていったっていい言いたいことが伝わるのでは、と思います。一つだけの意見ではなく、複雑にあらゆるものが絡まっていて、

家族やジェンダーの話も含め、すごい形で表現したなど。抽象的に表現している部分とリアル見せている部分のバランスも良かったです。全て抽象化すると意味がまたらなくなってしまうだろうし、逆に全て具象化すると、痛だけの作品にもなる可能性がありました。

岩淵 自分の中でも未だ解決していない葛藤をかたちにすることで、それを他者と共有して一緒に考えていこうという意思を感じました。

名和 SHU BROWNさん(P.8)が作品について、変色・退色したら写真が白くなって消えてしまうから、そうならないように補強すると言っていました。変色した色もとても綺麗でしたし、消えてしまっても良いのではと思いました。自分の体験を元にした主題なのはわかりましたが、写真が考えて撮られた作画的なものもあったので、ある意味ファッションナブルにも見えました。あるいは、自分の衝動や感情を一旦抑えて再構成しているのかなとも感じました。

岩淵 そのように再構成しないと出せない、痛みのようなものがあるのかもしれないですね。

保坂 名和さんも指摘するとおり、写真の中の黒を退色させる部分は恣意的に選んでいました。その選んでいる部分の意味が読み取れなかったの、例えば写真全体を退色させて、見えないものの意味を汲む、などのやり方がいいような気もしました。コンセプトや技術はまだ深められるように思いました。

名和 宇留野さん(P.12)の作品、面白かったです。

金澤 面白かったですね、作りこみもすごかったです。一つ一つの部屋に意味があったらもっと良かったです。私たち、宇治野宗輝さんのような、いろんなものを組み合わせで作った作品の、全部のパーツに意味があったりするのを見てきているじゃないですか。だから、部屋自体に意味がない、となるとちょっと惜しいという気持ちになってしまいます。

保坂 部屋の中に置かれていたものは実家で使っていたものを使用している、と言っていたのですが、瓶ビールは最近飲んだものだと言っていて、そこは実家縛りにしてくれたら面白かったかな、と(笑)。彼はある意味、絵の人だと思っていて、作品の裏側は綺麗にまとめていたし、構成も三連のものだったり、イメージで作品を考えているところがもったいなかったなど。むしろ部屋の中は深く、物はなくてもいいのでは、と思ったりもしました。置くなら置くで、意味が欲しかったですね。

名和 とはいえ、作品を通じて一つのエクスペリエンスをつくり出しているという点で、とても力のある作家だと思えます。光の入れ方やシンプルな機械の仕組み、タイマーだけで音を制御する工夫など、高い技術を感じました。過去作を見ても、構築物の面白さが印象に残ります。

保坂 今年も、それぞれの作品が違う完成度や強さを持っていて審査が難しかったです。ファイナリストに限らず、今の学生の作品の全体に言うこともできませんが、コロナ禍の状況が2020年から3年ほど続いていて、以前よりも海外や外に行く機会が大きく失われている世代でもありません。室内に閉じこもって制作をする時間が長かったでしょうから、この世には様々な作品があるということ、情報という形ではなく、実体験で見る機会が少なかったのかもしれない。外や社会と作品が繋がる、というよりも自分に向き合う作品が多い印象です。美術館も海外から作品を持って来れなかったり、そういった世情の影響が少なからずあったのではと感じました。

金澤 ただ、審議の中で上がった、感覚的に作っていたり、無意識に作っていたり、自身と向き合う作品を未熟と評価して良いのか、そこは私たちもよく考える必要があります。こういった評価の場や、意見を重ねていくことで、発展していく作品・作家も多くなります。ここまで作り上げることができる作家皆さんの、さらなる活躍が楽しみです。



CAF賞 2022 入選作品展覧会

2022年11月29日(火)~12月4日(日) 11:00-19:00
代官山ヒルサイドフォーラム F 棟 ヒルサイドフォーラム

宇留野 圭 名古屋芸術大学大学院

倉知 朋之介 東京藝術大学大学院

黒瀧 舞衣 東京藝術大学大学院

SAREENA SATTAPON 東京藝術大学大学院

SHU BROWN 多摩美術大学

Wei Ting CHEN 東京藝術大学大学院

轟木 麻左臣 東京藝術大学大学院

中田 愛美里 東京藝術大学大学院

花形 槇 多摩美術大学大学院

藤原 彩芽 武蔵野美術大学

松田 ハル 京都芸術大学大学院

南谷 理加 東京藝術大学大学院

みょうじ なまえ 東京藝術大学大学院

主催 | 公益財団法人 現代芸術振興財団

会場設営 | HIGURE 17-15 cas

グラフィックデザイン | Dynamite Brothers Syndicate

会場写真 | 木奥 恵三

ポートレート、審査写真 | 西田 香織

公益財団法人 現代芸術振興財団

TEL 03-6441-3264

E-mail contact@gendai-art.org

